素材研究（海外）

マラッカ（マレーシア）

市内の高台からは、今も多くの船が往来する東西貿易の要衝・マラッカ海峡を一望できます

サーモンピンクに塗られた建物が印象的なオランダ広場。主な見所は徒歩圏内というマラッカ観光の拠点です

中華・マレー・インド・西洋の味覚がミックスしたニョニャ料理もマラッカならではのもの

丘の上のセント・ポール教会に聳える白亜のザビエル像

中国人とマレー系女性との間に生まれたプラナカンのアート"ニョニャ陶器"も人気を集めています

街歩きで疲れたら古いレストランを改修したオープンカフェで一休み

大航海時代の面影感じる世界遺産の街 多彩な歴史が紡いだ豊かな文化と出会う

マレー半島とインドネシアのスマトラ島を隔てる全長約800キロのマラッカ海峡は、インドと中国を結ぶ最短航路となるため、昔から海上交通の要衝として多くの船が往来してきました。2008年にペナン島のジョージタウンとともに、マレーシアで初めての世界文化遺産に登録されたマラッカには、長い歴史の中で育まれてきた豊かな文化が今も息づいています。

東西貿易の中継点として発展

スマトラ島から渡来したパラメスワラ王子が建国した王朝の首都・マラッカ。早くからイスラム教を取り入れた王朝は、イスラム国からの商船を積極的に受け入れ、東西貿易の中継点として発展しました。

16世紀の大航海時代以降、ポルトガル・オランダ・英国の植民地支配を受け、戦時中は日本に占領されています。1957年にマレーシアが独立を果たした時、独立宣言が行われたのもマラッカでした。

マラッカの中心に位置するオランダ広場は、歴史的な建物やモニュメントが集中し、主な見所のほとんどが徒歩圏内にあります。1650年にオランダが建設し、19世紀半ばから英国が行政庁舎として使ったスタダイスは、現存する東南アジア最古のオランダ建築で、現在は、歴史・民族博物館になっています。マラッカ・キリスト協会はマレーシア最古のプロテスタント教会として知られ、セント・フランシス・ザビエル教会の敷地内には、ザビエルに日本行きを決意させた日本人・ヤジロウとザビエルの像が立ち、歴史を体感できます。

プラナカンが育んだニョニャ文化

マラッカのランドマークであるサンチャゴ砦も、周辺に博物館や公園などがあり、もう一つの観光拠点です。ザビエルが死後9カ月間も安置された1521年創建のセント・ポール教会までは、スタダイスから丘づたいにサンチャゴ砦へ降りるのがお薦めルートです。1511年にポルトガルが最初に築いた砦は、19世紀初めに英国によって破壊され、門だけが残されました。

マラッカには、15～16世紀に大陸から渡ってきた中国人とマレー系女性との間に生まれた「プラナカン」と呼ばれる人々がいます。中国文化をベースにマレーや西洋など様々な文化のエッセンスを凝縮し、ニョニャ（プラナカン女性）が育んだ「プラナカン・アート」もマラッカの新しい観光資源です。サロンスカートの上にはおった薄手の上着〝ニョニャ・クバヤ〟やパステルカラーも鮮やかな「ニョニャ陶器」などが人気を集めています。プラナカンに伝わる中華・マレー・インド・西洋の味覚をミックスさせたニョニャ料理もマラッカでしか楽しめないものです。